

浄土真宗本願寺派

ぶっじ

仏事のこと

じょうどしんしゅう

浄土真宗について



大切な人をしのび、安心して仏事を営むための一冊
お葬式・納骨・法事の流れや、お仏壇の飾り方など、
浄土真宗や仏教の基礎知識をやさしく解説。

浄土真宗本願寺派布教使監修

じょうどしんしゅう きょうしゅう

浄土真宗の教章（私のあゆむ道）

・宗名 浄土真宗
しゅうめい じょうどしんしゅう

・宗祖（ご開山） 親鸞聖人
しゅうそ かいさん しんらんしやうにん

・誕生 一七三年五月二十一日（承安三年四月一日）
たんじゅう じょうあんさんねんしがついちにち

・往生 一二六三年一月十六日（弘長二年十一月二十八日）
おうじゅう こうちやうにねんじゅういちがつ

・宗派 浄土真宗本願寺派
しゅうは じょうどしんしゅうほんがんじは

・本山 龍谷山本願寺（西本願寺）
ほんざん りゅうこくざんほんがんじ にしほんがんじ

・本尊 阿弥陀如来（南無阿弥陀仏）
ほんぞん あみだにらい なもあみだぶつ

・聖典 釈迦如来が説かれた「浄土三部経」
せいてん しゃかにらい じょうどさんぶきやう

・『仏説無量寿経』『仏説観無量寿経』『仏説阿弥陀経』
ぶつせつむりやうじゆきやう ぶつせつかんむりやうじゆきやう ぶつせつあみだきやう

・宗祖親鸞聖人が著述された主な聖教
しゅうそしんらんしやうにん ちよじゆつ おも しやうぎやう

・『正信念仏偈』（『教行信証』行巻末の偈文）
しやうしんねんぶつ けいぎやうしんしやう ぎやうかんまつ げもん

・『浄土和讃』『高僧和讃』『正像末和讃』
じょうどわさん こうそうわさん しやうざうまつわさん

・中興の祖 蓮如上人のお手紙 『御文章』
ちゅうこう そ れんにしやうにん てがみ ごぶんしやう

・教義
きやうぎ

阿弥陀如来の本願力によつて信心をめぐまれ、念仏を申す
あみだにらいほんがんりき しんじん ねんぶつ もう

人生を歩み、この世の縁が尽きるとき浄土に生まれて仏とな
じんせい あゆ よ えん づ じやうど う ぶつ

り、迷いの世に還つて人々を教化する。
まよ かえ ひどびと きやうけ

・生活
せいかつ

親鸞聖人の教えにみちびかれて、阿弥陀如来の信心を聞
しんらんしやうにん おし あみだにらい こころ き

き、念仏を称えつつ、つねにわが身をふりかえり、慚愧と歡喜
ねんぶつ とな み ざんぎ かんぎ

のうちに、現世祈禱などにたよることなく、御恩報謝の生活
げんぜ きどう ごおんほうしや せいかつ

を送る。
おく

・宗門
しゅうもん

この宗門は、親鸞聖人の教えを仰ぎ、念仏を申す人々の
しゅうもん しんらんしやうにん おし ねんぶつ もう ひどびと

集う同朋教団であり、人々に阿弥陀如来の智慧と慈悲を伝
つど どうほうきやうだん ひどびと あみだにらい ちえ じひ つた

える教団である。それによつて、自他ともに心豊かに生き
きやうだん じた こころゆた い

ることのできる社会の実現に貢献する
しゃかい じつげん こうけん

目次 もくじ

第一章

「浄土真宗の教えの概要」
じょうどしんしゅう

3

1. 仏教の始まりとは？

3

2. 仏教の目的と到達地点は？

5

3. 浄土真宗の最も拠り所とする経典は？
よ どころ きょうてん

7

4. 浄土真宗のご本尊は？
ほんぞん

8

(①本尊とは？②本尊の意味③本尊の形)

5. 浄土真宗の特徴

12

6. 宗祖・親鸞聖人について
しゅうそ しんらんしょうにん

16

第二章

「お葬式の流れ、ご法事の事」

17

「お葬式や法事のことについて」

19

「お布施について」

22

・浄土真宗におけるお布施の考え方

23

「法名と院号について」
ほうみょう いんごう

26

「お念珠（数珠）について」
ねんじゆ じゆず

27

「喪主側と参列者側の

28

持ち物と注意点」

・ご遺族へのお悔やみの言葉の例

30

「お葬式の準備、今後の流れ」

1. 大切な方が亡くなられた時

まくらぎよう りんじゅうごんぎよう

2. 枕経（臨終勤行）について

3. 通夜について

4. 夜伽よとぎについて

5. 葬儀（告別式）の一日の流れ

・ 喪主の挨拶の例文

・ 葬儀の終了に際して

第三章

「お葬式が終わってからの、ご法事の流れ」

39

・ 中陰（ちゅういん）について

まんちゅういん

「満中陰のご法事を執り行い

ましょう」

そくよう

「粗供養について」

そくよう

「粗供養・香典返し・会葬御礼品の

こうでんがえ

かいそうおんれいひん

違い」

「ご遺骨の納骨について」

・ 納骨のタイミング

・ ご遺骨の分骨と安置先

・ 胴骨どうこつの安置先

46

46

45

45

43

43

42

40

のどぼとけ

・喉仏の安置先

えいたいくようぼ こうどうぼ

・永代供養墓や合同墓の選択肢

ひがん めいにち

・お彼岸やご命日にお参りしましょう

くよう

「お墓の整理と新たな供養の形について」

ほんぞん おか

「仏さま（ご本尊）を迎えましょう」

にゅうぶつしき

「仏さまを迎えたら」（入仏式）

「お仏壇の飾り方」

「手元供養の飾り方について」

「手元供養の飾り方の例①・②」

「お経を読経しましょう」

かこちよう

「過去帳の使い方」

はつぽん

「初盆を迎えましょう」

ねんき

「年回（年忌）法要について」

ねんかいほうよう ほうじ

「年回法要・法事を執り行いましょう」

いっしゅううき ごじゅつかいき

「一周忌〜五十回忌までのご法事・

ご法要を執り行いましょう」

ぶつだん そうしよくぐ みようぐ

「お仏壇の装飾具や名号の意味」

「仏教を聞きに行ってみよう」

「別院リスト（本山・築地本願寺・直属寺院）」

「食事のことば」と解説

46

47

48

49

52

53

55

58

59

63

65

67

70

70

72

75

81

84

87

「はじめに」

大切な方を亡くされたとき、その悲しみは計り知れないものです。大切な方を亡くされるといふことは、どなたにとっても深い悲しみと戸惑いとまどを伴うものです。日常が大きく変わり、何をどのように進めていけばよいのか、不安が尽きない状況の中にいらっしやるかもしれません。

浄土真宗の教えは、阿彌陀如来じょうどしんしゅう（阿彌陀仏）の願いと誓いあみだによらい あみだぶつによってすべての人が救われるという、深い慈悲じひに基づいています。私たちは自分一人の力で生きているのではなく、縁えんや、周りの方々のご苦勞があり、人々が支えあって生きています。今まで出遭であってきた方々、お友達やご先祖様、ご両親など様々な方々に支えられて生きてきました。

浄土真宗の生活は御恩報謝・仏恩報謝の生活です。報謝とは恩に報いるということ

とです。手を合わせて、いつでもどこでも「南無阿弥陀仏」とお念仏を申します。ま

た、お勤め（お念仏や読経）は、仏徳讃嘆を表します。仏徳讃嘆とは、仏さまの

お徳をほめたたえることです。故人を偲びつつ、私もまた仏さまの教えをお聞かせ

いただきましょう。日々この命をお育ていただいていることに感謝いたしましょう。

本書は、浄土真宗の教えをやさしく解説してほしい、仏事やお葬儀の流れをわかり

やすく解説してほしいとのご門徒様のご要望により作成されました。皆様の一助と

なれば幸いです。

浄土真宗本願寺派 三重県名張市赤目相楽 光明寺住職

浄土真宗本願寺派 三重県名張市蔵持町里 西光寺副住職 金澤 定覚

じょうどしんしゅう

がいよう

第一章「浄土真宗の教えの概要」

じょうどしんしゅう

しゅうは

浄土真宗は、日本仏教の中でも特に多くの人々に親しまれている宗派の一つです

しゅうそ

しんらんしようにん

その教えは宗祖

親鸞聖人によって深められ、広く伝えられました。その中心には

あみだによらい

ほんがん

もと

きゅうさい

「阿弥陀如来の本願」に基づく救済の教えがあります。この教えは、私たち一人ひ

あみだによらい

おお

じひ

とりがどのような状況にあっても、阿弥陀如来の大いなる慈悲によって救われると

いうものです。まずは、仏教の始まりから順番に見ていきましょう。

ぶつぎよう

！. 仏教の始まりとは？（お釈迦さまについて）

（4月8日）

今から約2500年前、インドの北部地方にお生まれになり、^ご仏さま^ごとなられたの

つうしやう

しやか

しやくそん

しやかぞく

が、ゴータマ・シッダッタ。通称、お釈迦さま（釈尊）です。釈迦族の王子として



生まれ、29歳で出家しゅつけされました。修行や苦行くぎようを経て、菩提樹ぼだいじゆのもとで瞑想めいそうし、苦しみむみの原因である無明煩惱むみょうぼんのう（欲望よくぼうや執着しゅうちやく）を見抜き、「縁起えんぎ」の真理しんりを悟さとられました。

12月8日、この悟さとりにより「ブツダ」となり仏教が始まりました。

お釈迦様しゃかさまは、真理しんりを説いて人々を救うため、伝道でんどうの旅を開始され

ました。最初の説法せっぽう（初転法輪しよてんぽうりん）では、5人の修行仲間しゆぎやうちゆうに教えを伝

え、それが仏教の教えの広まりの始まりとなりました。以降、80

歳で入滅にゅうめつされる（亡くなられる）までの45年間、多くの人々に教えを説き、それ

が様々な経典きやうてんとなって今に伝わってきました。

これらのお経典の中に、浄土三部経じやうどさんぶきやうとよばれる浄土真宗が最も大切にされる経典も

含まれていました。



最後に「もろもろの事象は過ぎ去るもの。怠ることなく修行を完成しなさい」^{おこた}

^{だいはつねはんぎよう}

^{にゆうめつ}

（『大般涅槃經』）という言葉を残し、入滅されました。道を求め、怠ることなく生

きていく。これこそが、さとりに至る仏教徒のあり方である、と教えられたのです。^{ぶつぎようど}

2. 仏教の目的と到達地点は？^{ぶつぎよう もくてき とうたつちてん}

仏教の目的は、仏さまになること、すなわち「成仏」することです。成仏とは、^{ほとけ} ^{じようぶつ}

煩惱（煩わしい悩み）^{ぼんのう わずら なや}や迷いを超えて、真実の智慧と慈悲を備えた存在になること^{ちえ じひ そな}

を指します。仏さまに成ることが仏教における目標とされています。また、到達地^{ほとけ} ^{もくひよう} ^{とうたつち}

点として「浄土」^{てん} ^{じようど} ^{しめ}が示されます。仏教では、到達地点を「天国」^{てんごく}とは呼ばず、「浄土」^{じようど}

と位置づけています。^い ^ち



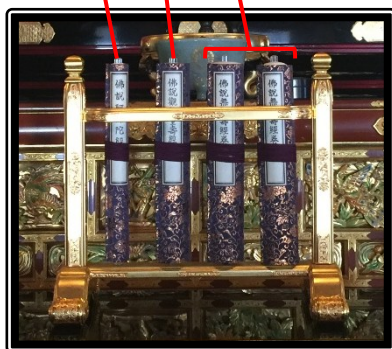
「浄土」^{じようど}とは、仏さまの智慧^{ちえ}と慈悲^{じひ}が満ちた世界であり、阿弥陀如来の本願^{あみだによらい ほんがん}によって成就^{じようじゆ}（完成^{かんせい}）された「極楽浄土」^{ごくらくじようど}がその代表例です。私たちの住む煩惱^{ぼんのう}や苦しみ^{くる}が多き世界（娑婆世界^{しゃばせかい}）から超え離れた清らかで苦しみのない世界です。この浄土^{じようど}に往生^{おうじよう}することを通じて、成仏^{じようぶつ}の道^{みち}が開かれます。

仏教では、成仏^{じようぶつ}に至るための方法がさまざまな経典^{きようてん}に示^{しめ}されています。これらの経典^{きようてん}には、それぞれに説かれた修行の道や教えが記されており、それらに基づいて仏教の宗派が形成されました。また、宗派ごと^{ほんぞん}にご本尊とする仏さまが異なる場合^{ほとけ}があります。このような背景から、各宗派はそれぞれの経典や教えを中心に特徴^{とくちよう}を持ち、それに基づいて信仰^{しんこう}が行われていると理解していただくといえましょう。

3. 浄土真宗の最も拠り所とする經典は？

それは「浄土三部經」です。

- ① 仏説無量壽經（上巻・下巻）（大經）
- ② 仏説觀無量壽經（觀經）
- ③ 仏説阿彌陀經（小經）



これら3つの經典は、「浄土三部經」とよばれ、阿彌陀如来とその浄土（極樂浄土）への往生が説かれているお經です。

補足：讚仏偈（嘆仏偈）・重誓偈（三誓偈）・往觀偈（東方偈）は仏説無量壽經の

中に出ています。また、正信念仏偈（正信偈）は、親鸞聖人がご製作されたお經

（正式には偈文）です。

4. 浄土真宗のご本尊は（①本尊とは？②本尊の意味③本尊の形）

じょうどしんしゅう

ほんぞん

ほんぞん

ほんぞん

いみ

ほんぞん

かたち

じょうどしんしゅう

ほんぞん

あみだによらい

あみだぶつ

あみだによらい

むげん

浄土真宗のご本尊は「阿弥陀如来（阿弥陀仏）」です。阿弥陀如来は、無限の光

しやうちやう

と限りない寿命を象徴する仏さまで、すべての人々をそのまま救うという大い

せいがん

ほんがん

なる誓願（本願）を立てられた仏さまです。

ほんぞん

① 本尊とは？

ほんぞん

しんこう

たいしやう

もつと

とうと

らいはい

ぼさつ

本尊とは、信仰の対象として最も尊び、礼拝の中心とする仏さまや菩薩

もと

うやま

よ

どころ

さまを指します。仏教の教えに基づいて、人々が敬い、心の拠り所とする存

しゅうは

ほんぞん

ぼさつ

在です。宗派ごとに本尊とされる仏さまや菩薩さまが異なりますが、それはそ

りねん

しやうちやう

れぞれの教えや理念を象徴するものだからです。

② 浄土真宗における本尊の意味

浄土真宗において、阿弥陀如来が本尊である理由は、その本願（誓願）に基づいています。阿弥陀如来は、すべての人々を分け隔てなく救い取るために無限に近い時間をかけて修行を行い、大いなる誓いを立てられました。本願を信じ、南無阿弥陀仏と称えるものは誰でも、命を終えたあとに浄土に生まれ仏さまと成る」という阿弥陀如来の願いを大切にしています。

このため、浄土真宗ではご本尊として阿弥陀如来を礼拝し、そのお姿やお心を通じて救いの教えに触れることを大切にしています。

③ 浄土真宗の本尊の形

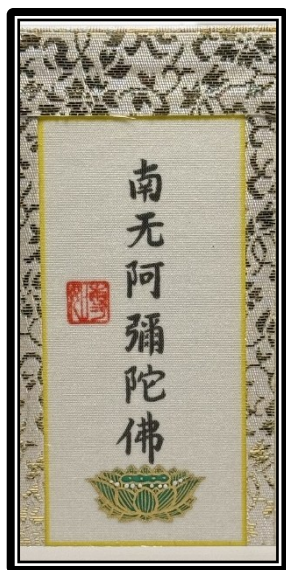
浄土真宗の本尊には、以下の形式が一般的です。

(一) 木像の阿弥陀如来立像

もくぞう あみだによらいゆうぞう
あみだによらい りつぞう かたち ひょうげん
阿弥陀如来が立像の形で表現されます。

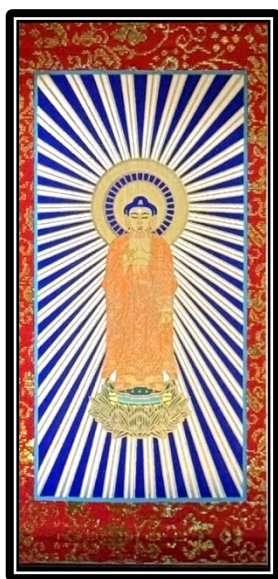
(二) 名号（みょうごう）

なも あみだぶつ
「南無阿弥陀仏」の六文字が書かれた掛け軸が本尊として用いられることも
ろくじ みょうごう
あります。六字名号と呼ばれます。

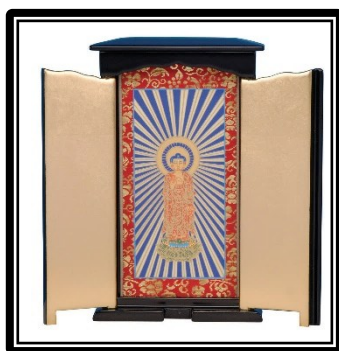


(三) 絵像 (えぞう) えぞう

あみだによらい
阿弥陀如来のお立ち姿が描かれたもの。



これらは、お部屋やお仏壇に安置され、日々のお勤めやお念仏を通して阿弥
陀如来のお心に触れ、心の依りどころとなります。



いちよう(縦24cm×横19cm×奥行9cm)



きく(縦17.2cm×横10.3cm×奥行2.9cm)

「いちよう・きく・携行本尊」
＜お問い合わせ先＞
本願寺 参拝教化部
電話：075-371-5181(代表)
FAX：075-371-7601



表面

裏面

携行本尊(縦90mm 横55mm 厚さ2mm)

じょうどしんしゅう とくちよう

5. 浄土真宗の特徴

じょうどしんしゅう ぶつきようしゅうは

浄土真宗の教えは、他の仏教宗派と比べても以下のような特徴を持っています。

じょうどしんしゅう じしん おこな

浄土真宗は、自身の行いや修行に頼る教えではなく、「他力本願」、すなわち阿

たりき たいせつ

弥陀如来の願いのはたらき（他力）にこの身を委ねることを大切にしています。

じょうどしんしゅう

浄土真宗は、厳しい修行や戒律を求めません。浄土真宗で大切にされることは

かいりつ

もんぼう

ちようもん

「聞法」です。聴聞とも呼ばれ、仏さまの教えやそのお心を聞かせていただくこと

あみだによらい みのり

を指し、最も大切な行いです。私たちは縁があつて阿弥陀如来のお法をお聞かせい

ちようもん

ただく身になりました。親鸞聖人は聴聞の左訓に「ゆるされてきく、信じてきく」

（聖典P145 聴聞）

（聖典P1292 第193条）

と示し、蓮如聖人は、「仏法は聴聞にきはまることなり」と記されています。

私たちの命がこの世に縁が尽きた時、私たちの命は阿弥陀さまの慈悲と願いの力

によりお浄土へ参り、仏さまとして生まれます。そして、必ず往生し成仏するのが
けつじょう

へいぜう（聖典 P156） 正定聚・平生業成

決定するのは、臨終のときではなく平生（ふだん）であります。したがって、成仏
していないなどの考えはありませんし、僧侶が魂を扱うなどの事は致しません。です
ので、お仏壇に魂を入れるという表現はしません。お仏壇またはご本尊を迎え入れた
時は、にゅうぶつしき 入仏式または入仏慶讃法要という表現を用います。にゅうぶつきようさんほうよう

また浄土真宗の特徴として大切なことは、まじないや自身の計らいに頼らないこ
とです。「いつまでも若く健康でありたい」「良い事が起こって欲しい」と思う方が多
いかもありませんが、病を避けたい、幸運を求めたいといった思いから占いや風水を
頼る事はしません。出来事は「縁」えんによって起きます。霊や祟りたのような觀念に囚わ
れることは不必要です。病氣や災害は起こり得ることであり、地震や大きな災害がい
つ起こっても不思議ではないのが現実です。人々の迷いや苦悩は、時代による価値観

の変化、過度の見栄や他人からの評価を基にしたものである事がほとんどです。阿弥

陀如来は、いつの時代でも自らの力では決して迷いの世界を抜け出せない凡夫のた

めにご本願を起こされました。ぶつがん しようきほんまつ「仏願の生起本末」といいますが、(注釈版聖典第二版 p251)法蔵菩薩ほうぞうぼさつ（後の阿

みだによらい

弥陀如来）は遥か昔から、どのようにして私たちを救おうか、無限に近い時間をかけ

て考えられ、たぐい希なる願いを立てられました。そして果てし無く長い期間ご修行

じようじゆ

の後、その願を成就して阿弥陀如来となられ、現にみようごう「名号（南無阿弥陀仏）」とな

って私たちを救う力となってはたらきつづけています。（仏説無量寿経に記載）この

阿弥陀仏の本願に誓われたように、阿弥陀仏が自身の成就された仏徳のすべてを南

無阿弥陀仏におさめて私たちに与えてくださる本願力回向のはたらきこそが、浄土

ほんがんりきえこう（聖典 p156）他力・本願力回向

真宗における救いの根本です。

あくごう

ほんのう

ほんぶ

私たちは悪業や煩惱に満ちた凡夫であり、その救われ難き私が、阿弥陀如来の本願

(聖典 P22 乗彼願力)(本願に乘託)

のはたらきに乗せられて必ず救われていきます。したがって、凡夫の計らいや自力を

(聖典 P170 本願招喚の勅命) みようごう

頼る態度は捨てて、阿弥陀如来のよび声に帰して名号のはたらきを疑いなくお聞き

たまわ

しよういん

(聖典 P1566 大信・真実信)

し賜ることが信心であり、浄土往生の正因(要)として大切です。

しようみようねんぶつ

なもあみだぶつ とな

これらのことをふまえ、私たちの称名念仏(南無阿弥陀仏と称えること)は決し

しようみよう

ほうおん

て「いいことがあってほしい」などの為に称える念仏ではありません。称名は報恩

であり、念仏の行者のはからいによるものではなく阿弥陀仏の本願によってそのよ

(自然法爾の事 聖典 P768)

うにあらしめられるものです。私たちは、浄土へ往生させていただくのうちであっ

なもあみだぶつ

たと、自ずから手を合わせて「南無阿弥陀仏」とお念仏を申す人生を歩むのです。

ふきようし

これらの阿弥陀如来のご本願のお話は、本願寺派の布教使さんや寺院でのお説教

(本書 P81 参照)

でお聞きすることが出来ます。実際にご法事や聞法の場に身を置き、ご住職さんやお

坊さんに尋ねてみる事をお勧めいたします。

6. 宗祖・親鸞聖人について

しゅうそ しんらんしようにん

しんらんしようにん (新暦1173年5月2日)

ぶつもん

ひえいざん しゅぎよう

親鸞聖人は京都で誕生し、9歳の時に仏門に入り、20年間比叡山で修行をされました。しかし修行に納得できず、さらなる道を求めた末に法然聖人（源空聖人）

しゅぎよう なつとく

じょうとしゅう かいそ

であ

あみ だによらい

きえ

（浄土宗の開祖）と出会い、あらゆる人を救う阿弥陀如来の教えに帰依されました

ねんぶつ だんあつ

えちご にいがたけん

るざい

念仏を弾圧されて越後（新潟県）に流罪となり、ゆるされた後は関東で念仏を広め、

ばんねん

しゅびつ

そそ

晩年は京都で執筆に力を注ぎ、

（新暦1263年1月16日）

90歳でご往生されました。

「絵画と共に巡る親鸞聖人の生涯」▼



（親鸞聖人の生涯を絵画と共にご紹介しております。）



そうしき

なが

ほうじ

こと

第二章・お葬式の流れ、ご法事の事

そうしき えんかつ と

お葬式を円滑に執り行うためには、事前じぜんの準備じゅんびが重要じゅうようです。ご家族かぞくの生前せいぜん、また

じしん そうぎかいじよう さが

はご自身の生前に葬儀会場を探しておくことをおすすめいたします。葬儀は葬儀

かいかん

てら

かのう

えら

会館で行う場合もあれば、お寺で執り行うことも可能です。どちらを選ぶかはご家族

いこう

きぼう

くわ

もよ

の意向や故人の希望に基づきますが、詳しくは最寄りの葬儀会場、またはお近くの浄

そうだん

土真宗本願寺派のお寺にご相談ください。

ふたん けいげん

事前にお葬式の準備を進めておくことで、いざという時の負担を軽減できます。特

かぞくそう

かんが

ひよう

きぼ

ないよう

に「家族葬」を考えている場合でも、費用は会場の規模やサービス内容によって異

みつ

かくにん

なるため、事前に見積もりやサービス内容を確認しておくことが重要です。たとえ

す おんがく

かいかんない しゆくはく

ば、葬儀会館によっては、好きな音楽を流してもらえるサービスや、会館内に宿泊

できる場合もございます。

しょう

この章では、故人が亡くなられてからお葬式までの流れについて説明し、その後、

せつめい

しよなかほうよう

しじゅうくにち

まんちゅういん

のうこつ

ぼん

はつぼん

いっしゅうき

さんかいき

初七日法要、四十九日の満中陰、納骨、お盆（初盆）、一周忌、三回忌、五十回忌に

いた

てじゅん

じゅん

お

至るまでの手順を順を追って解説していきます。さらに、喪主側と参列者側の持ち

もしゅがわ

さんれつしやがわ

ちゅういてん

しょうかい

物や注意点についても詳しくご紹介します。



「お仏壇の飾り方」

(写真は色々なお仏壇の基本的なセッティング例です。)

さんこう

ぶつぐ

参考にして仏具を配置してください。)

①ご本尊 (立像又は掛け軸)

りゅうぞう

じく

あみだによりいりゅうぞう

あみだによりい

・阿弥陀如来立像・阿弥陀如来の掛け軸

なもあみだぶつ

ろくじみょうごう

・南無阿弥陀仏の六字名号の掛け軸

②脇掛 (わきがけ)

りようわき

みぎがわ

しんらんしょうにん

・ご本尊の両脇の向かって右側に「親鸞聖人」

じゅうじみょうごう

きみょうじんじつぼうむげこうによりい

または十字名号「帰命尽十方無碍光如来」

ひだり

れんによしょうにん

かけじく

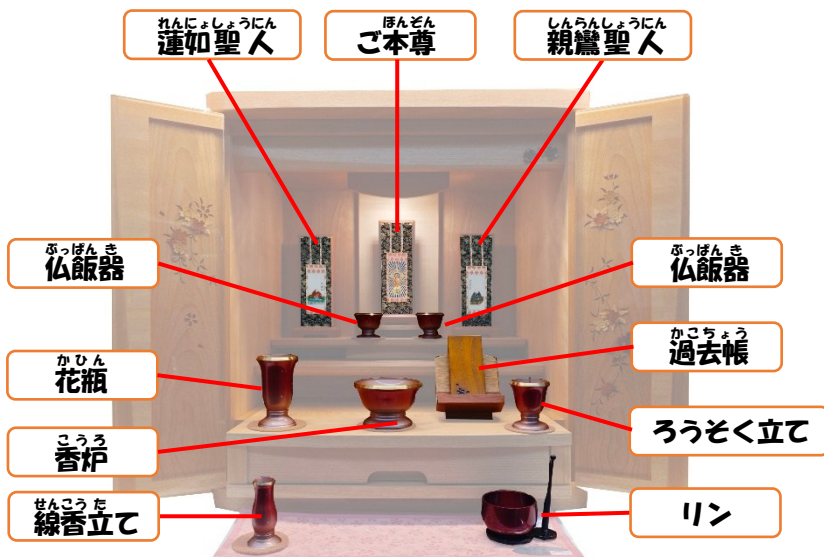
・向かって左に「蓮如聖人」の掛け軸

くじみょうごう

なもふかしぎこうによりい

または九字名号「南無不可思議光如来」

「モダン仏壇の飾り方」



モダン仏壇の写真提供ご協力先：三枝堂本店 (三重県名張市)

⑦過去帳（かこちょう）は一番下に見台を設置し、ご命日を開いて安置します。

⑧経卓（きょうじよく 経机（きょうぐくえ）には経本、線香差し、マッチ消し、リンなどを置きます。

お仏壇が無い場合のメモリアルスペースや手元供養

住環境の変化により、小さなお仏壇を置くことが難しい場合もあります。その際は、ご本尊を中央にお迎えし、遺影や過去帳を安置するメモリアルスペースを設けることをおすすめします。忙しい日々の中でも、帰宅後に一息つける場所があると心が安らぐでしょう。次ページで手元供養の飾り方を紹介しています。

また、ご命日や年忌法要の際に、自宅に僧侶を招くことが難しい場合は、骨壺や遺影、過去帳をお手次のお寺に持参し、本堂でお勤めしていただくことも可能です。納骨済みで骨壺がない場合は、過去帳のみでも問題ありません。遺影や骨壺の有無、必要な持ち物については、事前にお寺にご相談ください。

手元供養の飾り方について（大切なメモリアルスペース）

ほんぞん

いえい かこちよう

浄土真宗では、ご本尊を中央にお迎えし、遺影や過去帳はお仏壇の下段または外に配置するのが正式な作法です。そのため、遺影と骨壺のみを棚に置いて拝む形は推奨されていません。

すいしよう

こつつぼ

おが

しかし、住環境の変化により、一時的に棚などへ遺骨を安置することも考えられます。火葬場でお骨を受け取った際は、分骨証明書を取得し、大切に保管してください。これは、後にお墓や納骨堂などへ正式に納める際に必要となります。また、自宅の庭や他人の土地への埋葬は法律で禁止されていますので、ご注意ください。

まいそつ

墓地埋葬法

喪失や悲しみへのケア

本書では、公式な作法を尊重しつつ、グリーンフケアの観点からメモリアルスペースの配置例を紹介しています。これをきっかけに、ご本尊をお迎えすることで仏縁が深まり、亡くなられた方と共にお念仏を申し、心の依り所となる事を願っています。

よき こと

手元供養の飾り方の例①



上記は本山の免物「携行本尊」を使用した手元供養の飾り方です。

免物「携行本尊」「いちょう」「きく」は、省スペースで持ち運びも容易です。

※阿弥陀如来の慈悲と誓願により、私たちや大切な方々の命は必ず浄土へ迎え摂られ、極楽浄土で仏さまとなります。木像、絵像、あるいは「南無阿弥陀仏」の六字名号など、どのような形でも**ご本尊をお迎えすることが大切です。**

また俱会一処という、俱に一つの処（浄土）でお会いするという言葉がお経にでてきます。突然の別れは、淋しくとてもつらいものです。しかしそんな時に「必ずまた会える世界がある」という教えが、残された私たちにとって本当の心の支えとなっていくのです。（※ご納骨までの一時的な飾り方です。）

手元供養の飾り方の例②



上記は本山の免物「きく」を使用した手元供養の飾り方です。

LED製のろうそくや線香は、一人暮らしの方や施設でのご使用に便利で、安全にお参りできるアイテムです。大切な方への贈り物にもおすすめです。

「お仏壇（お内仏）にお参りをしましょう」

私たちは日々、多くのご縁に支えられて生きています。家族や友人、そして先立たれた大切な方々——すべての出遇いが、今の私たちを形作かたちづくっています。

お仏壇やメモリアルスペースに手を合わせることは、そうしたご縁を振り返り、感謝の心を育む大切な時間です。この章では、お参りの仕方しかたや、どのお経を読経すると良いかなどを説明していきます。

お参りの意義

お仏壇は、阿弥陀さまのみ教えにふれる場所であり、私たちを見守ってくださいる故人を偲ぶ場でもあります。

手を合わせることで、故人の面影を思い出し、残してくれた言葉や温かさに改めて気づかされることもあるでしょう。阿弥陀さまもまた、慈愛じあいに満ちた言葉を私たちに

向けてくださっています。

また、お仏壇に向かうことで様々な事を感じることができるよう。私たちの命は、多くの人に支えられ、育まれてきました。そのことに気づいたとき、自然と感謝の気持ちが湧わいてくるのではないのでしょうか。

お仏壇へのお参りの仕方（毎日挨拶したり、読経したりしましょう。）

お仏壇へのお参りを日常生活に取り入れることは、特別な準備がなくても始められます。毎朝や就寝前まいあさ しゅうしんまえに手を合わせ、感謝の気持ちを伝えるだけでも十分です。じゅうぶん

・朝は讃仏偈（さんぶつげ）をお勤めする。

・夜は重誓偈（じゅうせいげ）をお勤めする。

みじか
短い時間でも、仏さまの教えにふれることが大切です。

・忙しいときは「南無阿弥陀仏なもあみだぶつ」と6回称える。かいと

・「行ってきました」「ただいま」とお仏壇に声をかけるだけでも構いません。

仏さまや故人に今日の出来事を報告するように、自然な気持ちで話しかけてみて

ください。

命日や月命日には、少し特別なお参りを

・いつもより丁寧にお仏壇を整え、お花やお供えを用意し、心を込めて手を合わせ

ましょう。

・お経は「仏説阿弥陀経ぶつせつあみだきょう」または「正信念仏偈しょうしんねんぶつげ」を読経します。

お年忌ねんきやご法事では、浄土三部経の「仏説無量寿経ぶつせつむりょうじゆきょう」を読経することもあります。

必ず特定のお経でなければならないということはありません。様々なお経に触れ、とくてい

そのお言葉^{ことば}をいただきながら、お育てをいただいくことが大切です。読経^{どっきょうぎ}後に

^{ごんしょう}は いづく

は、御文章^{ごもんじょう}を拝読^{はいどく}します。御文章は、浄土真宗のみ教えがわかりやすく書かれたお

^{てがみ}

手紙^{てがみ}ですので、様々な御文^{ごふみ}に触れてみて下さい。

日々の暮らしのなかで、お仏壇に向かうひとときを大切にし、温かいご縁を感じな

がら過ごしていきたいですね。

「お経を読経しましょう。」YouTube 動画のQRコード紹介

毎日、どのお経をお勤めして頂いても構いません。以下に例を記載します。

^{ても}

お手持ちのスマートフォンでカメラでQRコードを読み込んでください。

- ・朝のお勤め「讃仏偈（さんぶつげ）」



讃仏偈の読経動画
信行寺様ご協力



讃仏偈の読経動画
桜嵐坊様ご協力

・タのお勤め「重誓偈（じゅうせいげ）」



重誓偈の読経動画
信行寺様ご協力



重誓偈の読経動画
桜嵐坊様ご協力

月命日のお勤めは

・「仏説阿弥陀經（ぶつせつあみだきょう）」



仏説阿弥陀經

パート 1



仏説阿弥陀經
続きパート 2



仏説阿弥陀經
続きパート 3
信行寺様ご協力

もしくは

・「正信念仏偈（しょうしんねんぶつげ）」



正信念仏偈
信行寺様ご協力

年忌法要・ご法事

「仏説無量寿經」もしくは「正信念仏偈」

・「仏説無量寿經」



仏説無量寿經
桜嵐坊様ご協力

「過去帳の使い方」

浄土真宗では、故人のご命日と法名を記録するために過去帳を用います。一般的な位牌は使用せず、過去帳を通して故人のご縁を大切にし、仏縁を深めていきます。

過去帳の記入方法きにゆう（お寺様が記入してください。）

過去帳には、故人の亡くなられた日ごとに記録をします。具体的には、以下のよう
に記載します。

故人のお名前ぞくみよう（俗名ほうみようと法名）

亡くなられた年月日ねんがつび（例：令和〇年〇月〇日）れいわ



日 一 廿		
令和〇年〇月二十一日	法名 釋 〇〇	俗名 〇〇〇〇
		享年〇〇才

たとえば、二日に亡くなられた方と29日に亡くなられた方がいる場合は、それぞれ「二日（二十一日）」のページと「29日（二十九）」のページに記入します。

過去帳のお参りと活用

過去帳は、ご命日や月命日に開いてお参りすることで、故人を偲ぶ大切な機会となります。

その日のページを開いて読経します。

例えば、21日に亡くなられた方がいれば21日（三十一日）のページを開き、29日に亡くなられた方がいれば29日（二十九日）のページを開いてお参りをします。

読経とともに手を合わせる。

過去帳を開くことで、故人のご縁を思い起こし、仏法にふれる機会となります。

過去帳を日々のお参りに活かしながら、先立たれた方とのご縁を大切にし、阿弥陀さまのお心にふれてまいりましょう。

「年回（年忌）法要について」

年ごとの命日を「祥月命日（しょうつきめいにち）」といい、この日に行う仏事を年回（年忌）法要、一般には「法事」と呼びます。
いっばん

年回法要は、忙しい日常の中で自分を見失いがちな私たちが、先祖の命日を縁に阿弥陀如来の教えと再び出会わせていただく大切な仏事です。
であ

亡くなられた年の翌年を「一周忌」とし、それ以降は亡くなられた年を一として数えます。そのため、たとえば「三回忌」は亡くなられてから丸二年目にあたります。
よくとし

「年回法要・法事を執り行いましょう。」

じゅうしち

一周忌、三回忌、その後の年回法要は、七回忌、十三回忌、十七回忌、二十三回

さんじゅうさんかいき

忌、二十七回忌、三十三回忌、五十回忌と行われます。その後は、五〇年ごとに営む

のが一般的です。また、地域によっては二十三回忌と二十七回忌に分けず二十五回忌を執り行う場合や、三十七回忌や四十三回忌を執り行う地域もございます。

一般に一周忌は、親族はもちろん、友人や知人にも参列してもらい、盛大に営まれることが多いですが、三回忌以降は故人と血縁の深い親族や特に親しかった人を招くか、家族だけで営む場合が増えます。

複数の故人の年回法要がたまたま同じ年に重なる場合には、併せて行うこともあります。これを「併修」といいます。詳細については、所属のお寺に相談するのが良いでしょう。

年回忌法要がいつかわからない方は、年回忌表をご確認いただけるページをご用意いたしました。次のQRコードを読み取り、是非ご活用ください。



いっしゅうき ごじゅつかいき

「一周忌〜五十回忌までのご法事・ご法要を執り行いましょう」

法事・法要は、故人を偲び、仏さまの教えに触れる大切な機会です。懐かしい思い出を語り合い、ご縁に感謝しながら、僧侶と共に読経しお念仏を唱える時間でもあります。

じょうど おうじょう

浄土真宗では、お浄土に往生されて仏さまとなった故人を偲ぶとともに、その法要をご縁として、僧侶から仏さまのお話をお聞きます。阿弥陀如来は、私たち一人ひとりをそのまま受け入れてくださると説かれています。しかし、日々の生活の中で、私たちはさまざまな情報や意見に影響を受け、何が真実かを見失いがちです。

いけん えいきょう

そのため、仏さまの教えをただ形だけで受け取るのではなく、自分自身の問題として

しんけん

真剣に向き合い、尋ね求めることが大切です。

阿弥陀如来の願いを「私への呼びかけ」としてお聞きし、日々の生活の中でその温

かさを感じてみましょう。お念仏を唱えることは、仏さまの呼びかけを自分の耳で聞くことでもあります。阿弥陀如来の光は、いつでもどこでも私たちを照らし、見守ってくださっています。例えば、辛い時や悲しい時、時には怒おこってしまったり、過ちを犯おかしてしまったりすることもあります。そんな時こそ手を合わせて「南無阿弥陀仏」と称え、阿弥陀如来のお声をお聞きしましょう。

法要を通じて、仏教の教えに触れる時間を大切にしましょう。阿弥陀さまは、いつでもどこでもあなたと共におられます。

法事の流れについて

一周忌・三回忌は、多くのご親族が集まり、故人を偲ぶとともに思い出を分かち合

う機会となります。お寺での法要やご自宅のお仏壇でのお勤めなど、形にとらわれず、心を込めてお勤めしましょう。

七回忌以降は、家族中心の法要になることもありますが、かいき回忌法要を続けることは、故人とのご縁を改めて味あじわい、家族のつながりを深める貴重きちょうな時間となります。日常から少し離れて、仏さまの前で手を合わせることで、自然と感謝の気持ちが生まれます。

読経するお経について

浄土真宗では、ぶつせつむりようじゆきよう「仏説無量寿経」しやうしんねんぶつげ「正信念仏偈」などがよく読まれます。「仏説無量

寿経」は、阿弥陀如来の大いなる誓願せいがんを説き、「正信念仏偈」は親鸞聖人が阿弥陀如

来の救いのはたらきを称えられたものです。お経を通して仏さまの願いを聞き、共に

味わいましょう。

「お仏壇の装飾具や名号の意味」

お仏壇はご本尊を中心に、仏さまの教えを象徴的に表す場です。そこに置かれる装飾具や名号には、それぞれ深い意味があります。ここでは、浄土真宗本願寺派の考え方を踏まえて、灯明・仏花・仏飯・嗜好品の扱い・名号・欄間の彫刻などについて分かりやすくまとめます。

どうみょう

●灯明・ろうそくの意味

お仏壇に灯すろうそくの光は、仏さまの智慧（暗闇を照らす光）と、慈悲の温かさを象徴します。火がやがて消える様子は「諸行無常」——物事は常に移り変わるという仏さまの教え——を思い起こさせ、命のはかなさや時の流れに心を向ける気付きになります。近年は安全面で電池式の灯（LED）を用いる家庭もありますが、灯りが仏の光を表すという意味合いは変わりません。

●仏花（ぶっか）

仏前に供えるお花は、生花（せいしか）が基本とされます。生花は香りや生命のはたらきを示し、やがて枯れることで「諸行無常」を私たちに教えて下さいます。造花を用いると「長持ちさせたい」、「手入れが面倒だから」といった自己中

心的な発想になりやすく、推奨されていません。

お花は仏さま側に向けるというより、私たち側に向けて供えるのが一般的です。それは、仏様が私たちのことを思う慈悲の心の象徴としてお花を見るのだと、浄土真宗では味われてきたからです。しかし、毎日立派な生花を用意するのは金銭的にも大変です。CGIや環境の事を考え、たとえば「お年忌や祥月命日などの特別な日は生花を供え、日常は簡易な供花や造花を用いる」といった工夫もよいでしょう。形式よりも「感謝の心や意味や意義を考える事」が大切です。

●仏飯（ぶっぱん）をお供えする理由

仏飯は、毎朝炊いたご飯（お仏飯）をお供えするのが基本です。法要やお盆・彼岸など特別な日は餅や果物なども添えます。仏飯は私たちが日々いただいている命の糧（いのちのめぐみ）への感謝を表す象徴です。

日本では古来よりお米が主食であり、太陽の光・大地・水・育てる人の手など、多くのいのちの働きとご苦労が一粒の米に凝縮されています。お米を仏前に供えることで、私たちは自分が多くのいのちに支えられて生きていることを実感し改めて「いただきます／ごちそうさま」の報謝の心をあらわします。

たばこなどの嗜好品は基本的には供えません。お供える物は、私たちのいのちのめぐみ、いのちの源への感謝です。したがって、仏さまへの敬意と感謝の表現であり、煩惱をおろもの・清浄さを欠くものは避けます。この事を念頭に置いて、故人が生前好んだものをお供えすると良いでしょう。供物は、餅・果物・季節の食物・生花などがよく選ばれます。お供えをして読経した後は、すぐに下げて皆さままで分け合っ

● 名号（みょうごう）—— 六字名号・九字名号・十字名号の意味

名号とは、主に六字名号「南無阿弥陀仏」を指します。「南無」はサンスクリット語 *namo*（ナマス）に由来し、「帰依する」「おまかせする」という意味です。したがって六字名号は「阿弥陀仏に帰依します」という言葉になります。

お仏壇では、阿弥陀如来の絵像か六字名号のいずれかを、本尊として中央に安置します。名号には、そのものに衆生救済の阿弥陀如来の本願のはたらきがおさめられています。

・右側の掛軸（向かって右）に掛けられる十字名号「帰命尽十方無碍光如」。これは、阿弥陀如来の光が十方（すべての方向）に限りなく広がる無碍（おびえ・さまたげのない）な光であることを示しています。

・左側の掛軸（向かって左）に掛けられる九字名号「南無不可思議光如来」の「不可思議光」は、阿弥陀仏の智慧と慈悲の光が言葉では言い尽くせないほど深く尊いことを表します。

「南無」と「帰命」は同じ意味であり、いずれも「帰依する／おまかせする」ということを示します。九字・十字の名号は、意味の上では六字名号（南無阿弥陀仏）と同じです。ご本尊の名号を右から左へ並べて読むと、『正信偈』と対応する語順（例…帰命無量寿如来 南無不可思議光）になります。また、九字名号、十字名号の下にも蓮華の台座が付されています。これは「これらが阿弥陀如来（本尊）である」とを表すしるしです。

● 仏壇の欄間や前卓に描かれる鳥

—— 浄土の六鳥 ——

お仏壇の欄間や前卓に施される鳥の図案は、經典に説かれる浄土の美しい風景や音楽を想起させるための装飾です。『仏説阿弥陀経』に登場する六鳥がその由来とされ、一般的には次の六種が挙げられます。

① 白鶴…白鳥または天鷲とも言われる白い水鳥で、コウノトリとも言われます。浄土の清らかさを象徴します。

② 孔雀くじゃく：毒蛇やサソリ等の毒虫に強い習性から、邪気を払う象徴として「孔雀明王」の名で仏教の信仰対象にも取り入れられています。煩惱を払う智慧の象徴とされます。

③ 鸚鵡おうむ：頭に冠羽のある美しい鳥です。人の言葉を真似る性質から、仏法を伝える象徴とされます。

④ 舍利しゃり：しばしば学術的にはシャーリカなどと音写され、百舌鳥と訳され、百通りの言葉を真似て理解することができます。九官鳥の一種ともいわれ、人の言葉を理解し真似る賢い鳥とされ、仏法を伝える象徴とされます。

⑤ 迦陵頻伽かりようびんが：カラヴィンカの音写。好声鳥こうしょう、妙声鳥みょうしやう、美音鳥みおん、妙音鳥などと意識されます。極めて美しい声で鳴くと伝えられる鳥で、素晴らしい音声で仏法を伝え、浄土の清らかさを象徴します。

⑥ 共命鳥ぐみょうちやう：身体が一つで、頭が二つに分かれている鳥です。名前の通り「命を共にする鳥」で、『仏本行集経』や『雑宝蔵経』に例話が説かれています。

これらの鳥は、経典に描かれた極楽浄土の清らかで雅な景色や、常に法を讃える音声を想起させ、聞く者の心を念仏や仏法に向けさせる効果があります。各図像・彫刻にはそれぞれ象徴的な意味が込められています。

仏壇ぶつだんの欄間らんまや前卓まえじよくに描かれる鳥「浄土じやうとの六鳥ろくちやう」(写真)



① 白鴿(びやっこう)



③ 鸚鵡(おうむ)



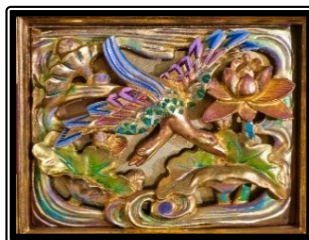
⑤ 迦陵頻伽(かりようびんが)



② 孔雀(くじゃく)



④ 舍利(しゃり)



⑥ 共命鳥(ぐみょうちやう)

●お仏壇の金箔の装飾の意味

お仏壇にほどこされる金箔や金彩は、単なる豪華さや格式のためだけの飾りではありません。金の輝きは阿弥陀如来のはたらき——時間や空間をこえて照らす無限の光（無量光）——を象徴します。たとえば『仏説阿弥陀経』には漢文で「彼佛光明無量 照十方國 無所障礙」とあり（意訳…その仏の光ははかりしれず、十方の国々を照らし、何ものにもさまたげられない）。この「光明無量」「照十方」「無所障礙」の教説が、金による光の表現の根拠になっています。

また、『無量寿経』『観無量寿経』などの浄土三部経には、極楽浄土の莊嚴（楼閣や七宝、黄金の砂など）に関する具体的な描写が多く見られます。これら極楽浄土の世界が「光」と「宝」で満たされているというイメージは、仏壇空間に極楽浄土を再現するモチーフとなっています。

物質面から見ても「金」は腐食しにくく、長く輝きを保つ性質があるため「不変」や「清浄」の象徴として尊ばれてきました。阿弥陀如来（阿弥陀仏）は別名「無量寿仏（限りない命をもつ仏さま）」、「無量光仏（無限の光をもつ仏さま）」と称されます。黄金の輝きはそれ自体が阿弥陀如来の光を視覚化する適切な素材であると言えます。

●蓮の花（蓮は仏さまの象徴）

仏具の意匠によく用いられる蓮華は、仏さまご自身や仏さまのはたらきを象徴する大切なモチーフとして重んじられています。その理由と意味を以下にまとめます。

『維摩経』には「蓮華は高原の爽やかな所には咲かず、湿った泥沼にこそ生ずる」といった趣旨の表現があり、そこから「蓮は迷いと苦しみ（泥）の私たちの世界（娑婆）にこそ現れ、そこで人々を導く仏さまのはたらき」を示すと説かれました。仏像が蓮台に坐す姿や、仏具・經典の意匠に蓮が用いられるのはそのためです。また、観音菩薩が手に蓮を持つ表現は、慈悲と救いをもたらすことを示しています。

京都国立博物館に収蔵されている「法華経」には、一字一字の字の下に蓮台を描く意匠が見られますが、これは「お経の言葉そのものが仏さまである」——つまり経文が仏さまのはたらきとして我々の前に現れていることを表しています。

正信偈の中には「蓮華蔵世界」という語があり、これは華嚴経に由来する極楽浄土の表現です。同じく正信偈の「分陀利華」は白蓮華を指し、『観無量寿経』には「念仏を称える人は白蓮華のようである」と記されています。娑婆に生きながら阿弥陀さまの教えに遇い、お念仏を喜ぶ人は、泥の

中に咲く蓮の花のように、泥に染まらない清らかな姿として
讃えられるのです。

私たちは生きるために殺生をしたり、嘘をついたり多くの過ちを犯します。それを当然のことと考えていると、いつまでも泥の世界に埋もれてしまいます。しかし、お念仏を申し、自分のありさまを受け止め、生かされていることに気づくと、生きていることが不思議であり、喜びが深まります。他人に迷惑をかけずに生きられないのが人間であるという自覚のうえに、さまざまなご縁により育てられていることに気づけば、あらゆるものに対する感謝の心——仏恩報謝・御恩報謝——が自然と生まれてくるでしょう。

「蓮華の五徳」

蓮華の五徳は、特定の経典からの引用というよりは、蓮の花の姿を通して示される仏教の教えや、人間の「仏性」を表す象徴として表現されています。少し味わってみましょう。

① 淤泥不染（おていふぜん）の徳

蓮は泥（私たちの煩惱・不浄）に根を持ちながら、花は泥に染まらず清らかに咲く。↓煩惱にまみれた凡夫である私たちが、阿弥陀仏の本願に遇って「信心」を恵まれることの象徴です。

② 一茎一花（いっけいっか）の徳

蓮は一本の茎に一輪の花が咲きます。
↓ 私たちのいのちは一人ひとりに固有のもので、他の誰とも変わりようがないということを表しています。

③ 花果同時（かかどうじ）の徳

蓮の花は一度に開きます。そして、咲くと同時に実ができています。↓ 阿弥陀如来のご本願に出遭い、お念仏を喜ぶ私たちは、白蓮華と讃えられ既に仏さまに成ることが確定しています。（現生正定聚）。阿弥陀様の信心を恵まれた今、仏さまになる事が定まった様子を、蓮の花が咲くと同時に実ること例えて味わうことが出来ます。

④ 一花多果（いっかたか）の徳

一輪の花が多くの実を結ぶ。一つの花から沢山の果実を実らせる↓ 真実の教えに出会うと、一気にたくさん真実が見えてくることを例えています

⑤ 中虚外直（ちゆうこがいちよく）の徳

蓮の茎は中が空洞で外は真っ直ぐ伸びます。↓ 仏法に出遭ったものは、内面に柔軟さや余裕をもち、外側には清く正しい振る舞いができますこの「中虚外直」をヒントにして建てられたのが、五重塔や三重塔、東京スカイツリーです。

● 阿弥陀如来（絵像）の後光について

あみだによらい えぞう

本願寺派（西本願寺）は、絵像本尊の上部の「**後光線**が**8本**」で描かれている掛軸本尊を標準とします。大谷派では同様の掛軸本尊で6本の後光線が描かれます。後光は、阿弥陀如来の救いの光が時間や空間を越えてどこまでも届くことを象徴し、無限に広がる光の姿を表現しています。なお、後光の線をすべて数えると48本になり、これは阿弥陀如来の私たちへの願いである「**四十八願**」と同じ数になります。四十八願の詳細は『**仏説無量寿経**』に記されています。



本願寺派は後光線が上部に8本あります。

その他の仏具にも宗派ごとの意匠差があります。例えば、本願寺派（西本願寺）の三具足や華瓶は黒く宣徳色系、輪灯は主に菊輪灯、供筒は六角形が主、吊灯籠は猫足型、家紋は下り藤など、本願寺派特有の特徴が見られます。仏具をお求めの際は、仏具店に「本願寺派（ほんがんじは）」とお伝えください。

● 門徒式章を着用してお参りしましょう。

門徒式章とは、仏前における正装として首から下げて着用する法具のことです。宗紋である「下り藤紋」の刺繍が施されています。もともとは着物の上に着用した肩衣という正装を簡略化したもので、昭和7年（1932年）に式章として制定されました。西本願寺境内や聞法会館の売店などで購入でき子ども用から大人用まで多様なデザインが揃っています。参拝記念やお土産としても適しており、日々の読経、ご法事、帰敬式や菩提寺・本願寺参拝の際にもご着用いただけます。



子ども用式章



門徒式章の例

「仏教を聞きに行ってみよう」

浄土真宗や仏教の教えにふれる機会は、身近にたくさんあります。お寺での法要や法話に参加したり、インターネットで配信される法話を聴くことで、日常の中でも仏さまの教えに触れることができます。ここでは、初めての方にもわかりやすく、代表的な聞法（もんぼう）の場と見つけ方をお伝えします。

にしほんがんじ

京都・西本願寺（お西さん）での法話

京都にある西本願寺は、浄土真宗本願寺派の本山として多くの法要や法話が行われています。境内には聞法に親しめる聞法会館もあり、本山の僧侶による法話や、参拝者のための法話会が定期的に開かれています。遠方の方や足を運びにくい方でも、そうした法話の中にはインターネットで配信されるものもあり、自宅から聴聞することができます。



本願寺公式
ホームページ



聞法会館 QR

オンラインでのお聴聞

ちようもん

現在、多くの寺院や本山が法話や行事の映像を公開しています。公式の動画配信やYouTubeチャンネルを通して、ご自宅のパソコンやスマートフォンから気軽に法話を聴くことができます。録画が残されていることも多く、都合のよい時間に繰り返しお聴きいただけます。以下のQRコードをご参照下さい。

全国の寺院・法話会の探し方

お住まいの地域の寺院や別院（べついん）でも法話会が催されています。まずはお近くのお寺のホームページや案内板を確認してみましょう。地域の寺院に直接問い合わせると、初心者向けの会や子ども向けの催しなど、参加しやすい集まりを教えてもらえることがあります。全国のお寺で開催されている法話会の場を一覧できるサイトがありますので、お近くの行事を調べてみるのもよいでしょう。



全国のお説教の場
浄土真宗の法話案内



YouTube

仏教法話紹介

布教使（ふきょうし）とは

布教使とは、浄土真宗本願寺派で教えを伝えるために専門の課程を学び、本山から任命される僧侶のことです。布教使は各地の寺院や会館、講演の場などで法話や説教をつとめ、聞く人が仏法に親しめるようにやさしく話してくれます。地域の行事に招かれてお話をされることも多く、初めて聞く方でも理解しやすい工夫がなされることが一般的です。

ご讃題（ごさんだい）とは

ご讃題は、法話や説教の始めに掲げられる「主題」を示します。法話の中心は、仏徳讃嘆にあります。その讃歎する内容の主題にあたる部分を「讃題」と言い、聖典のご文から選びます。浄土真宗では浄土三部経や教行信証、和讃など、聖典から引用されることが多く、その言葉を通して「今日はどんなお話を聞くのか」を心に留めやすくなります。ご讃題は、話の方向性や聞く姿勢を整える役割を果たします。

法話の最後に、蓮如聖人の書かれた御文章（浄土真宗の要点を平易に説いたお手紙）を拝読されます。聴聞の肝要（いちばん大事なところ）を改めて示されます。

節談説教（ふしだんせつきょう）とは

節談説教は、ことばに節（抑揚）や間（ま）をつけ、身ぶりや語りの構成を用いながら教えを伝える、伝統的な説教の表現方法です。単に情報を伝えるだけでなく、聞く人の心に届く「語りの技法」として発達してきました。歌のようなりズムや語りの高低、テンポの変化を使って物語性を持たせるため、初めて聞く方にも印象深く、感情に訴える力があります。節談説教の語りは演劇的な要素を持ちますが、その内容は浄土真宗の教えに根ざしており、表現の工夫もあり、教義をより身近に感じてもらうことができます。

本書では、節談説教の具体的な聞きどころとして、桜嵐坊さんによる「承元の法難」の節談説教（YouTube）へアクセスできるQRコードを掲載しています。ご協力いただきました桜嵐坊さんに深く感謝申し上げます。ぜひQRコードからご覧いただき、節談説教の語りと教えの結びつきを実際にお聴きください。（承元の法難とは、1207年に法然聖人の門弟らが処罰され、法然聖人や親鸞聖人が流罪となった事件です。）

「節談説教」（承元の法難）
桜嵐坊様へ協力・YouTube動画QRコード



「浄土真宗の主な行事やイベント」

具体的日程や手続きについては、まず所属する菩提寺のお世話になっていらっしゃるお寺）にご相談ください。

● 帰敬式（ききようしき）

仏の教えに帰依することを公に表す式。仏弟子としての出発。本山・別院・所属寺院で実施。法名の内願や所属寺の同意が必要な場合があります。

● 報恩講（ほうおんこう）

親鸞聖人に感謝し聞法する最重要の法要。法話・勤行・講演など。年一回大きく行われることが多い。10月頃～2月頃まで

● 涅槃会（ねはんえ）

お釈迦さまの入滅（示寂）を偲び、無常と仏のはたらしを学ぶ法要。一般に2月15日。經典の読誦や法話、涅槃図の掛置などで、仏の教えの無常や救いの意味に触れる機会となる。

● 花まつり（灌仏会） かんぶつえ

釈迦牟尼仏（お釈迦様）の誕生を祝う行事。慈しみを育む。一般に4月8日。花御堂に誕生仏を安置し、甘茶をかける儀礼など。

● 宗祖降誕会（しゅうそごうたんえ）

親鸞聖人のご生誕を慶ぶ法要。5月20日～21日付近（寺院で異なる）。親鸞聖人の教えや生涯に触れる日。日程は寺院案内を確認。

● 彼岸（春・秋） ひがん

先祖・供養讃嘆と浄土を願う期間。聞法に向き合う機会。春分・秋分を中心に前後一週間程度。お墓参りやお寺での勤めに参加。地域差あり。

● 盂蘭盆会（お盆） うらぼんえ

故人・先祖を偲ぶ法要。聞法と供養を重視。地域で7月または8月。初盆は特に手厚く。準備は所属寺へ相談。

●成道会（じょうどうえ）

お釈迦さまが悟り（成道）を得られたことを慶ぶ法要。覚りの尊さと仏法の意義を思う日。一般に12月8日。勤行や法話を通じて、日頃の聞法の心を新たにすることが出来る。

●年始・年末の法要（がんたんえ元旦会・しゅしやうえ修正会・じよやえ除夜会）

新年の挨拶や一年の仏恩への感謝。元旦会・除夜会など。参拝者向けの勤行や法話あり。

●永代経・追悼法要

仏法の継承・追悼のための法要。寺院や組で設定。戦没者追悼や門徒全体の追悼など、内容は多様。

●初参式・成人など節目の式典

人生の節目に仏法に触れる儀式。年中・節目ごと（寺院で実施）。幼児の成長祝いや成人の節目など、家庭と寺院の結びつき。

※本書でご紹介した行事・イベントは一部になります。

初めての方もどうぞお気軽にお越しください。式次第や作法、服装などわからない点があれば、遠慮なくお近くのお寺様にご相談ください。もし喪失や迷いの中にあるときは、寺院での聞法や法話が思いがけず支えとなる場合があります。必要があれば寺院の住職や役員が相談に応じますので、一人で抱え込まずにご相談ください。本書が皆さまの日々の指標となり、行事へ足を運ぶきっかけとなれば幸いです。どうぞお近くの寺院で実際の勤行や行事に触れてみてください。皆さまでお越しを、寺院一同、心よりお待ちしております。

●別院リスト（本山・築地本願寺・直属寺院）

以下のリストは、主な別院です。各種行事から納骨やお参りの依頼、お住まいの近くの本願寺派の寺院を紹介して頂いたりすることも可能です。詳しくはリストを以下のQRコードよりご参照下さい。



▲別院リスト PDF

QR コード

ほうおんこう

報恩講に参加しましょう。
(御正忌報恩講)

ごしやうきほうおんこう

しんらんしやうにん

全国で毎年10月頃〜2月頃まで、親鸞聖人のご命日を縁として報恩講が開催されます。浄土真宗において、もっとも大切な法要です。親鸞聖人の恩徳をたたえ、おすすめになられた念仏の教えを聞くことを趣旨とするものです。是非、お近くの浄土真宗本願寺派のご寺院の報恩講に参加してみましょう。各寺院によって開催時期が異なりますので、詳しくは参加したい寺院にお問い合わせください。知友などお誘いあわせして頂いても構いません。沢山のお参りをお待ちしております。

仏事のすすめ

まずは気軽に、お坊さんに相談してみましょう。お坊さんは仏教の専門家であり、

日々の暮らしや心の悩みにも耳を傾けてくださいます。月忌参りや年忌法要といったご縁のあるときに、少しずつ仏教に触れてみてはいかがでしょう。この本でご紹介しきれなかったことも、まだまだたくさんございます。

仏教には多様な教えや見方があり、その一つひとつが私たちの生き方を照らしてくれます。「これで十分だ」という慢心は、仕事や日常の中でも気をつけなければなりません。仏教は「仏道」とも言われるように、まさに歩み続ける道でもあります。日本では古くから剣道や茶道など、〈道〉と名のつくものを大切にしてきました。

仏道もまた同じで、一度きりの学びではなく、日々の暮らしの中で少しずつ重ねていくものです。皆さま一人ひとりが、自らの歩む道を見つめ直し、怠ることなく求め続けていく——その積み重ねこそが、仏事に親しむ大切な心構えと言えるでしょう。

「食事のことば」

私たちは日々、さまざまないのちをいただき、多くの人の支えによって生かされています。食事もそのひとつであり、食材となる動植物のいのちや、それを育て、運び、調理してくれる人々の尽力によって成り立っています。

食事のことばを唱えることで、そのことを思い、感謝の気持ちを持つことができ、何気なく食べる一食一食を大切にし、食事のありがたみを感じながら過ごしています。ただければと思います。以下●は代表者のみ唱和。○は一同と一緒に唱和します。

食前のことば

●多くのいのちと、みなさまのおかげにより、このごちそうをめぐられました。

○深くご恩を喜び、ありがたくいただきます。

食前のことばの解説

私たちが日々いただく食事には、多くのいのちが関わっています。動物や植物のいのちをいただくこと、それを育て、届けてくださる方々がいることを思うと、食事は決して当たり前のものではないと気づかされます。

「多くのいのち」という言葉には、食べることの意味を改めて考え、感謝の心を持つ願いが込められています。また、「みなさまのおかげ」と言うことで、食材を届けてくれる人、料理を作ってくれる人の働きを忘れずにいたいという思いが表されています。「深くご恩を喜び、ありがたくいただきます」という言葉には、ただ感謝するだけでなく、その恵みをしっかりと受け止め、大切に味わう気持ちが込められています。

食後のことば

● 尊いおめぐみをおいしくいただき、ますます御恩報謝につとめます。

○ おかげで、ごちそうさまでした。

食後のことばの解説

食事を終えたとき、私たちは改めて、多くのいのちと人の支えによって生かされていることを実感します。「尊いおめぐみ」とは、ただ食べ物をいただくのではなく、いのちをつなぐ大切な恵みとして受け取ることを意味しています。

「おかげで、ごちそうさまでした」と唱えることで、食事が誰かの手によって支えられ、決して当たり前のものではないことを思い起こすことができます。何気ない食事の時間が、感謝の気持ちをおこすときになればと思います。

食卓に飾れるようポストカードサイズの「食事のことば」をダウンロードできるようにご用意しました。毎日の食事の時間にそっと寄り添い、いのちや支えてくれる人への感謝を感じるきっかけになればうれしいです。以下のホームページのQRコードを読み取っていただき、お好みの「食事のことば」のカードをダウンロードしてお使いください。

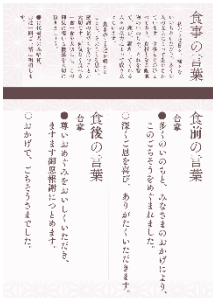
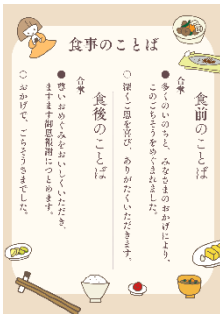
「食事のことば」のカード

ダウンロードページQRコード←



「食事のことば」

カードのサンプル例



さいづに

新たな仏縁との出会い

本書では、浄土真宗の基本的な教えや、葬儀・法要の流れ、お仏壇の飾り方やお参りの方法などについてお伝えしてきました。仏教が初めての方にとっても、日々の暮らしの中で仏さまの教えにふれることは、心を落ち着かせ、故人やご先祖とのつながりを感じる大切な機会になるのではないででしょうか。

たとえば、お仏壇に手を合わせ、静かに故人を思う時間を持つこと。ご法事を営み、家族や親しい方々とともに故人の歩みを振り返ること。お寺を訪れ、法話に耳を傾けることで、仏さまの願いにふれること。こうしたひとつひとつの営みが、自然と仏縁を深めていくことにつながります。

仏法にふれることは、決して「こうしなければならない」と決まりがあるものではありません。阿弥陀さまは、どんなときも私たちを見守り、救いの光を注いでくださっています。今、その教えに耳を傾け、自分から尋ねてみることで、日々の暮らしの中に新たな気づきが生まれることでしょう。

この本をきっかけに、お仏前に向かい、ご法事を営み、お寺に足を運んでみて下さい。仏さまの教えが、皆さまの歩みを照らすものとなることを心より願っております。合掌 南無阿弥陀仏 拜

浄土真宗本願寺派 三重県名張市光明寺 住職

浄土真宗本願寺派 三重県名張市西光寺 副住職 金澤 定覚

ちよしやしうかい

著者紹介

かんしゅう

監修

加来 宗悦

西本願寺

僧侶養成所中央仏教学院

本科卒

西本願寺

伝道院卒

(布教使養成所)

浄土真宗本願寺派布教使資格所持

自坊

雲林山専廣寺

福岡県築上郡築上町宇留津

浄土真宗本願寺派布教使資格所持

福岡県築上郡築上町宇留津

へんしゅうしや

編集者

金澤 定覚

大阪薬科大学卒

薬学学士

薬剤師国家資格所持

浄土真宗本願寺教師検定(専修)

課程卒

浄土真宗本願寺派教師資格所持

浄土真宗本願寺派住職資格所持

長命山百花院

西光寺副住職

(三重県名張市蔵持町里)

普照山竹林院

光明寺住職

(三重県名張市赤目町相楽)

共同発行所

東海教区伊賀組

長命山百花院

西光寺

(三重県名張市蔵持町里)

初版二〇二五年九月二三日

西光寺発行所代表

金澤 定節

西本願寺

僧侶養成所中央仏教学院

本科卒

西本願寺

伝道院卒

(布教使養成所)

天理大学外国語学部朝鮮語学科卒

花園大学文学部仏教学科卒

三年編入卒

現名張市ユネスコ協会理事

浄土真宗本願寺派布教使資格所持

博物館学芸員資格所持

遺品供養士2級所持

東海教区伊賀組

普照山竹林院

光明寺

(三重県名張市蔵持町里)

初版二〇二五年九月二三日

浄土真宗本願寺派布教使資格所持

本願寺名古屋別院教区会議員

博物館学芸員資格所持

遺品供養士2級所持

東海教区伊賀組

長命山百花院

西光寺住職

初版二〇二五年九月二三日

お勤めYouTube動画掲載協力

浄土真宗本願寺派布教使

【桜嵐坊の仏教部屋@7676amida】様

浄土真宗本願寺派輔教【信行寺 神崎修生の寺子屋チャンネル】様



発行所 西光寺ホームページ QR コード

<https://www.nabarisai kouji.com>

著書紹介

「お経から知るはじめての浄土真宗」

毎日忙しいあなたにホッと一息。仏教ってなに？浄土

真宗ってなに？お経って何が書いてあるの？「南無阿弥陀

仏」って聞くけど、どういう意味なんだろう？そもそも宗派

もいっぱいあるよね？など

仏教の歴史、浄土真宗の基礎、正信念仏偈をメインに

現代語訳と解説を記載し、お経についての簡易解説が記載さ

れています。



Amazon 税込 1,250 円

電子書籍 Kindle 版 税込 850 円

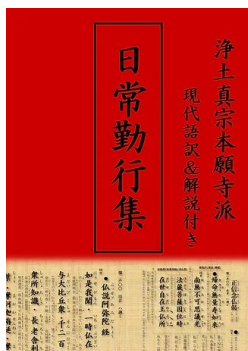


電子書籍 Kindle 版 税込 1,250 円

A5 サイズ 税込 1,760 円



B5 サイズ 税込 1,860 円



電子書籍 Kindle 版 税込 1,250 円

A5 サイズ 税込 1,650 円



B5 サイズ 税込 1,760 円

【日常勤行集 現代語訳と解説付き】
日常的に読経されるお経を掲載し、
日々のお勤めに役立てていただけます。

【浄土三部経 現代語訳と解説付き 法事勤行要集】
浄土真宗が最も拠り所とする三つの經典（仏説無量寿
経、仏説観無量寿経、仏説阿彌陀経）について、要点をま
とめたものです。浄土三部経の全体を尋ねやすいように
各和讃の下部に「今までのあらすじ（概要・概論（最後に）」
と記載し、初めての方でも尋ねやすく作成されています。